

幕末明治の写真師列伝 第四十六回 内田九一 その十一

①「既に天下の趨勢を洞察し、大阪を去て江戸に向はんと欲す、偶々幕府の軍艦「回天丸」東上するに會し、便船を請うて江戸に出づ、時に慶応二年なり。」

（「本邦寫真家列傳（其十四）・故内田九一」より）

②「翌二年將軍慶喜公江戸に帰還するや先生亦艦に陪して東す」

（「月乃鏡」、「故内田九一先生」の項より）

①②共に、内田九一は「慶応二年（一八六六）に幕府軍艦に陪乗して江戸に下がった」と記述されている。これらのことから、①の「偶々幕府の軍艦「回天丸」東上するに會し、便船を請うて江戸に出づ、時に慶応二年なり。」が、やはり重要な記述となる。『故内田九一短歴』にも同様のことが記載されている。やはり幕府軍艦「回天」の動きを調べる必要がある。

そこで仮にこの慶応2年（1866）の時というのが事実とすると、幕府軍艦「回天」がこの時に江戸に向かったかどうかが問題となるわけだが、藤井哲博著『小野友五郎の生涯』（中公新書、昭和60年10月）によると「幕府軍艦回天丸」は、元はプロシア軍艦「ライプツヒ」で、外輪船のため艦齢わずか5年で英国に売られ、商船「イーグル」号となり（原主は米人ウワールズ）、「慶応二年六月に再武装の上幕府に売られた」とある。この「原主は米人ウワールズ」というのはイギリスが仲介して、幕府にこの船を売る前の持ち主という意味と思われる。

また、慶応2年6月に長崎でイギリスより幕府が幕府軍艦「回天丸」を買上げ、「富士山丸」と共に、幕府の第二次長州征伐のために小倉口の戦鬪の援護につき、「回天丸」は長州軍と砲戦を交えている。その後（8月）、小笠原老岐守は長州軍を支えられずに、「富士山丸」に乗って逃げ出し、この「富士山丸」に同行して、「回天丸」もまた大坂港に戻っている。そして、慶応2年8月20日に、家茂の死去発表。（実際は7月20日朝、死去）將軍家茂の遺骸は、ちょうど、この頃に購入したばかりの「長鯨丸」に乗せられて江戸に戻ることになる。この「長鯨丸」の急遽購入交渉が決まるのは7月下旬、8月はじめには、品川沖から出航するが、英国人乗務員のストのため、一時、神奈川に停泊し、そして、ようやく「長鯨丸」が兵庫・大坂に向けて神奈川沖から出航したのは、8月13日。こうやってみると、この「長鯨丸」は將軍家茂の遺骸を運ぶために急遽購入されたようである。おそらく、「富士山丸」や「回天丸」は幕府の第二次長州征伐の小倉戦争直後ということもあり、將軍家茂の遺骸を運ぶには、不淨という意識もあったからではないだろうか。この「長鯨丸」は9月3日に天保山で將軍家茂の遺骸を乗せ、9月5日には品川沖に到着する。「富士山丸」や「回天丸」は、この「長鯨丸」の護衛のためいっしょに江戸に戻ったのであろう、あるいはこの將軍家茂の死去の前後に江戸に戻ったと思われる。

ということで、①の記載を重視すると、「内田九一は慶応2年9月に、どういう伝手を使ったのかよくわからないが、とにかく幕府軍艦に便乗させてもらって、江戸に行った」という仮説がまず立てられる。

勝海舟『勝海舟全集12巻 海軍歴史Ⅰ』『勝海舟全集13巻 海軍歴史Ⅱ』（勁草書房、1974年）によると、慶喜公が大坂を退去した時（慶応4年1月7日）には、幕府軍艦「回天丸」は、「咸臨丸」と共に江戸にいたことが確かであるから（慶応3年12月25日から慶応4年1月14日まで江戸）、②の「翌二年將軍慶喜公江戸に帰還す

るや」という記述だと、これも「回天丸」の動向と明らかに時期的に矛盾することになる。

また、社団法人日本写真協会編『日本写真史年表』（昭和51年7月）などの諸書に、内田九一が「慶応2年1月に江戸に行った」という記述も見られるが、これもこの時の船が「回天丸」だとすると、「回天丸」は慶応2年6月に長崎でイギリスより幕府が買上げられるまで、まだ幕府軍艦となっていないのだから、「慶応2年1月」という時期が合わない。もちろん内田九一が乗った船が「回天丸」とは違う船ならば充分考えられる。したがってここまでで言える事は、「内田九一が慶応2年に江戸に船で（幕府軍艦に乗せて貰って）東上した」ということのみである。

さらにこの「回天丸」の、慶応2年（1866）の動向について調べてみることにしよう。基本資料としては慶應義塾図書館編『村撰津守喜毅日記』（塙書房、昭和52年）にある「丙寅西航日記・慶応二年八月二十九日より慶応三年十月晦日まで」の記述内容がある。「丙寅西航日記」の慶応2年10月14日のくだりによると、「回天御船、去十二日暁御側衆始出帆之旨、御届上ル」とあり、この記述からこの慶応2年10月12日暁に、「回天丸」が兵庫から江戸へ行ったことがわかる。この慶応2年12月10日のくだりによると「回天へ兵公御乗組、去三日品海出帆、昨九日兵庫着船之由、申来」とあり、この記述から「回天丸」は慶応2年10月13日から12月9日まで関西には居なかったことがわかる。

また、慶応2年晦日のくだりに「去ル廿七日朝鮮十二人請取、回天出航之御届、啓阿弥ヲ以兵部殿へ上ル」とあり、「回天丸」が慶応2年12月27日に再び兵庫から出航していることもわかる。

以上のことから、慶応2年に内田九一がこの「回天丸」に搭乗したとすれば、この慶応2年10月12日と同年12月27日の二つの機会が考えられる。このどちらであろうか。後述するが、『故内田九一短歴』の記述より、江戸に着いた内田九一が「鉄砲洲の倉庫に保管した器械・薬品は火事からかろうじて免れ」とあることから、慶応2年10月12日という方が、この記述の辻褄が合うように思われる。

では、慶応2年（1866）のいつ頃という時期の問題についてさらに別の視点から検討してみよう。そのことを知る手がかりはやはりそれぞれ次の部分にある。

①「内田氏嘗て長崎に在る頃、松本良順（後の松本順國手）大村の舎蜜試験所に在り、依て互に相識る、當時松本良順神田和泉橋通に居を構ふと聞き、即ち往いて松本を訪ひ、暫らく其家に停まる、居ること須臾にして戊辰の乱あり、松本家亦を捨てて東北に奔る、内田氏即ち去て横浜に赴く、時に石川某なる者あり、氏の妙技に感じて資を投じ、寫真館を設けて其技を振はしむ、下岡蓮杖氏既に本町通に在りて業を営む、今又内田氏の業を開くあり、両々相對峙して業務日に月に盛んなり」

（「本邦寫真家列傳（其十四）・故内田九一」より）

②「幕臣松本良順氏（後の軍医総監順氏）特に先生待つ事厚し、乃ち横浜馬車道通に寫場を開き次で明治二年東京淺草茅町に支店を設く、建築宏壯當時唯一の洋式寫場なり、随ふて中外の顯官貴紳の撮影を求むるものは必ず轅を先生の門に停め繁盛実に驚くべきものあり。」

（「月乃鏡」、「故内田九一先生」の項より）

（森重和雄）